

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520278

研究課題名(和文)メアリ・ウルストンクラフトにおける国家と女性の進歩の概念の研究

研究課題名(英文)Mary Wollstonecraft's Notion of Progress of Nation and Women

研究代表者

石幡 直樹 (ISHIHATA, Naoki)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：30125497

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：フェミニズムの鼻祖とされるウルストンクラフトのテキストから、「進歩」を共通項として成立する国家と女性の類似性を抽出して、その意味と相互の影響関係を分析した。

未開状態から文明社会への「進歩」は、豊かで不安のない生活と高度な精神活動による文化を生み出す。しかし、『北欧紀行』に見られるように、スウェーデンやデンマークの自然と接したことで、彼女は、単純な進歩史観には疑問を呈するようになる。

彼女の逡巡は、近代国家の成立と自らの女性としての表象とを重ね合わせつつ、「進歩」の功罪を問い直す懐の深い思索を重ねたことの証であり、ラディカルな女権論者としてのウルストンクラフト像の別な側面を示している。

研究成果の概要(英文)：When we turn to Mary Wollstonecraft's Letters Written in Sweden as an reflection of her former literary works, mainly of The Rights of Woman, it appears that her self-emphasis in the former is caused by an urge to discover and recover her authentic self and to express it fully and creatively, which we might call the embryotic Romantic subjectivity. Then the comparison of these two is likely to lead us to go through Wollstonecraft's transition or evolution from the education of woman to the self-education, from the vindication of woman to the vindication of herself, and finally from reason to imagination. Wollstonecraft's self, thus divided between reason and imagination, attained both the inward and outward to absorb everything into itself and to dissolve itself into everything, which is the bliss of her solitary self-education through journeying far away from home. Her individual mind grows by revealing and attempting to fix its own contradictory characteristics.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学

キーワード：ウルストンクラフト 進歩 国家 女性

### 1. 研究開始当初の背景

リンダ・コリー (Linda Colley) は『ブリテン創造』(*Britons: Forging the Nation 1707-1837*, 1992) で、女権拡張論者は、ルソー (Jean-Jacques Rousseau) の唱道する女性像は受動的ながらも家事と教育を通じて夫と家庭を支え健全な国家の育成に重要であると捉えたと述べる。その例に漏れないメアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-97) も、女性の精神的自立と家庭の運営が近代国家形成の重要な構成要素と考えていた。小説、紀行文、評論に健筆を振るった彼女の女性論と国家論は、相似の様相を見せつつそれぞれの推論に相互に影響を及ぼし、その論考はこれらの著作を通じて国家と女性の進歩の概念を普及させた。

申請者は 1993 年の日本英文学会での口頭発表「Mary Wollstonecraft の女性教育観」では、代表的著作『女性の権利の擁護』の女権思想を、初期の徳育本 (conduct book) と比較し、強硬な女権論の裏面には封建的な女性観が隠れていたと指摘した。1993-94 年度には科研費を得て、『擁護』以降の彼女の思想の変化を自我意識との関連から考察した。その成果を発展させて英文論文 Mary Wollstonecraft's Introspective Journey in Scandinavia (*Enlightened Groves: Essays in Honour of Professor Zenzo Suzuki*, 1996) にまとめ、後期の『北欧紀行』では内面の吐露が見られ、女権拡張論が初期の評論より複雑になってその自我意識の展開には近代的自我の萌芽が見られると論じた。また、1997 年のイギリス・ロマン派学会シンポジウムでの発表を「メアリ・ウルストンクラフトの分別と多感」(『英文學研究』第 77 巻第 1 号、2000 年) にまとめ次のように論じた。女性の弱点でもあり美德でもあるとされた感性は、彼女らを規定し縛りつける鎖でもあったが、逆に理性によって彫琢された感性は、男性の築いた道徳律の牢獄から逃れる手段ともなった。2002-03 年度は科研費を得て、英国ロマン主義文学の自然愛に見られる環境意識の源流を探り、論文「女としての自然」(『つくられた自然 (岩波講座文学 7)』岩波書店、2003 年) で、他者としての自然/女性の表象を考察し、「女/自然」の権利回復の動きを文学作品のテキストに探った。2006-08 年度は科研費を得て、「女としての自然」と「自然としての女」という双方向的な二重の隠喩表象を探り、英国ロマン主義文学における、人間による抑圧の対象となった自然と、男性による抑圧の対象となった女性という類比概念の成立を検証している。直接の研究対象は『北欧紀行』であり、その成果の一部として、同書の翻訳を進めている。さらに 2008 年度以降は科研費の分担研究者として、帝国主義の基盤が築かれたロマン主義時代に一大ブームを迎えた旅行記の、歴史資料そして

文芸資料としての意味を探っている。イギリスが海外に覇権を拡大し、人間と物資の移動や交易の増加、異文化との接触・軋轢を経験した時代を、オリエンタリズム、帝国主義、「イギリス的なもの」(Britishness) などの視点から解釈する研究を基盤として、それらが旅行記という当時流行の言説においてどう表彰されているか、またそれがロマン主義という文芸思潮とどう関わっているのかについて、歴史と文学を専門とする 7 人の共同研究による解明を目指している。申請者は、ウルストンクラフトのフランス滞在時の著作および書簡と『北欧紀行』を上述の観点から解読しようと試みている。

本研究はこれら一連のウルストンクラフト研究を基盤として、それらを融合発展させるものとして準備・企画されたものである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、ウルストンクラフトの著作に見られる女性と国家にまつわる「進歩」(improvement) の概念を比較しつつ、この女権論者にして社会改良論者が進歩史観にもとづきつつ、また批判を加えつつ構築した文明論の様相と、これらの著作の当時の社会による受容について探らうとするものである。

### 3. 研究の方法

本研究は、研究代表者による関連著作や資料の分析と解釈を主な方法とする。直接の研究対象は、『女性の権利の擁護』、徳育指導書『子女教育考』(*Thoughts on the Education of Daughters: with Reflections on Female Conduct, in the More Important Duties of Life*, 1787)、自伝的フィクション『メアリ』(*Mary: A Fiction*, 1788)、未完の小説『女性の虐待』(*The Wrongs of Woman: or, Maria. A Fragment*, 1798)、および『北欧紀行』などである。著作と資料の分析以外にも、国内・国外に資料収集を目的とした出張を計画している。

### 4. 研究成果

研究成果は以下の 5 . にあける 2 冊の図書である。そのうちの翻訳『ウルストンクラフトの北欧からの手紙』の訳者解説の一部を以下に引用する。

メアリ・ウルストンクラフトは一七五九年四月二七日ロンドンで生まれた。七人の兄弟姉妹の長女で、兄一人、弟三人、妹二人がいる。父エドワード・ジョンは織物業に従事したのち農業を営んだが、忍耐力に欠け農場経営の失敗のため転居を繰り返した。アイルランド出身の母エリザベスは怠惰な性格で、短気な夫には従順で長男を溺愛した。一七七八年一九歳でメアリは両親の元を離れ、ある未亡人の手伝い兼話し相

手として二年間住み込みで勤めた。その後母の看病や妹の世話のために家に戻ったが、一七八二年に親友ファニー・ブラッドの家に同居を始める。翌一七八三年に妹やファニーとロンドン郊外に私塾を開設したが、二年後にはそれを閉じる。ファニーの両親のアイランドへの旅費を工面するために道徳本『女子教育考』(一七八七年出版)を執筆後、彼女自身も貴族の家庭教師としてアイランドへ渡る。一七八八年ロンドンに戻り、急進的な書籍を出版していたジョゼフ・ジョンソンの書店のために書評や翻訳を手がけ、ウィリアム・ゴドウィンを始めとする進歩的知識人と知り合う。同年に自伝的小説『メアリ』を出版した後、一七九〇年には、フランス革命を非難したエドモンド・バークの『フランス革命の省察』に対する反論『人間の権利の擁護』で自由信奉を弁じて著述家として名をなした。一七九二年に女性解放思想の暁鐘とされる『女性の権利の擁護』(以下、『擁護』)を同書店から出版し、当時心を寄せていたジョンソンの友人で画家のヘンリー・フーズリへの思いを整理し、革命後の状況を自ら見聞する目的で一二月にパリに旅立つ。一七九五年英国に戻り、一七九七年ウィリアム・ゴドウィンと結婚するが、娘メアリの出産後に産褥熱による敗血症で三八年の生涯を閉じた。

『北欧からの手紙』(正式書名は『スウェーデン、ノルウェー、デンマーク短期滞在中にしたためた手紙』、以下『手紙』)は、ウルストンクラフト生前の一七九六年にジョンソン書店から刊行された。この作品はギルバート・イムレイという人物に宛てた書簡という形式を取るが、実際には発送されていないと見られ、おそらく出版を目的として旅行中に書かれた日誌がその土台と思われる。なお、旅行中に実際にイムレイ宛てに送られた書簡は、ウルストンクラフトの死後ゴドウィンによって編集、出版されている。

イムレイはアメリカの独立戦争に参加した陸軍大尉で、戦後は土地投機や調査に携わり、地誌や小説を書いている。革命後のフランスに渡って政治や商業に関わった。一七九三年春パリでウルストンクラフトと出会い、翌一七九四年五月四日、二人の間に娘ファニーが生まれた。翌年四月彼女はイムレイを追ってロンドンに戻るが、彼が貿易事業と他の女性のために彼女を見捨てたことを知って絶望し、五月の終わりに自殺未遂を起こす。そのわずか二週間後、彼女はイムレイの求めに応じて彼の失踪した貨物船の補償請求の代理人として、一七九五年六月末から一〇月初めまでの三か月半スウェーデン、ノルウェー、デンマークの三国を巡った。船の失踪についてはデンマーク王立委員会が調査中だったが、イムレイの立場は法律上微妙だった。英国は革

命フランスとスカンジナビア中立諸国間の貿易を封鎖していたが、彼の貨物船はその封鎖令を犯していたのである。

当時の二人の状況を考えれば、イムレイがなぜウルストンクラフトに北欧行きを要請したのか、また彼女がなぜそれに応じたのかは、にわかには理解し難い。だが、イムレイにとっては彼女を北欧へ派遣することは、彼女に気分転換を促して二人の間に距離をおくと同時に、貨物船の詳報を探る絶妙の手段であった。そしてウルストンクラフトがこの提案に応じた理由は、転地療養、フランス革命に対して中立姿勢を取った北欧諸国への関心、イムレイの仕事を手伝うことが二人の関係修復につながるのではという希望、ロンドンを離れイムレイへの感情依存から逃れたいという気持ちなどであったと思われる。また彼女にとっては、渡航と旅行記出版は経済的自立を求める手段という意味合いもあったと考えられる。

一八世紀の英国では旅行記文学が人気を博していた。スモレットの『フランス・イタリア紀行』(一七六六年)やスターンの『センチメンタル・ジャーニー』(一七六八年)の他にも、女性を含む多くの作家が紀行文を発表していた。ウルストンクラフトの『手紙』の特徴の一つに率直な心情吐露があげられるが、それは自然描写などがなく感情中心の紀行である『センチメンタル・ジャーニー』に類似しており、さらにルソーの『告白』(一七八一 八)や『孤独な散歩者の夢想』(一七八二)の影響も色濃い。ウルストンクラフト自身が「前書き」で、「とりとめないこれらの手紙をしたためながら、私はどうしても自分を語る人　「それぞれの話の小さな主人公　になってしまいました」と述べているように、北欧の自然や社会の紹介とそれらにまつわる省察であると共に、本書は彼女の自伝であり内省の記録でもある。そしてその飾らない感情の発露こそ、『手紙』が多くの読者に感銘を与えた理由であろう。ゴドウィンとの間に生まれた娘メアリは後に詩人シェリーの妻となるが、彼らが一八一四年にヨーロッパ大陸に駆け落ちをした時には本書『手紙』を携えて行った(メアリはその二年後ジュネーブ郊外に滞在した際に『フランケンシュタイン』を書いている)。ゴドウィンは、『女性の権利の擁護』の著者の回想』(一七九八年、以下『回想』)第八章でこう述べている。「もしも読者が著者と恋に落ちるように書かれた本があるとしたら、私にとってはこの本がそれであろう。彼女は我々の心を憂いで満たしやさしさで包み込む口調で、自らの悲しみを語り、同時に賞賛の限りを集めるような天賦の才を見せている。『擁護』がベストセラーとなり一躍時の人となる一方で、その急進的で早熟な女権論のためにホラス・ウォルポールに「ペチコートをはいたハイエナ」と揶揄されたウルストンク

ラフトには、このように真摯で素朴な心情吐露を見せる側面もあった。

一七九八年一月シュロップシャーのウェムで、ユニテリアン派の牧師を務めていたハズリットの父の家にコールリッジが来訪した。感激の面もちで会話に加わった一九歳のハズリットに、コールリッジはメアリ・ウルストンクラフトに会ったことがあるかと訊ねる。ハズリットは、ほんの短い時間だが一度だけ会ったことのあるウルストンクラフトについて、彼女は自分の述べた意見に対する夫ゴドウィンとの反論をいとも軽やかに楽々と斥けているように思えたと述べる。それを聞いてコールリッジは「それは想像力豊かな人間が、知性だけの人間に優っている点のほんのひとつの例だ」と述べている。

コールリッジによってこのように、当代随一の急進的な政治評論家・作家であった夫のゴドウィンよりも高く才気の評価されたウルストンクラフトは、女性は理性を身につけることによって合理精神を持つべきであると『擁護』において主張して、感性への批判を展開した人として知られる。だが彼女は決して理性一辺倒の人であったわけではない。コールリッジが看破したように、ウルストンクラフトは「想像力の人」でもあり、ゴドウィンによれば、「直観的洞察力」を持った人でもあった。『回想』第一〇章でゴドウィンは、理知的な美を直観で把握する能力に欠ける面がある自身と比較して、ウルストンクラフトは誰よりも多くそれを身につけていたと述懐している。「彼女の宗教や哲学は……感情と審美眼の純然たる産物であった。……厳密な意味では、推論をほとんどしないにもかかわらず、彼女の決断がどれほど正確であったかは驚くばかりだった」。

このような感情と想像力にあふれる内面の告白に加えて読者の心を捉えて止まないのは、『手紙』に一貫して見られる、人類、社会、そして女性は「進歩」しなければならないという彼女の信念である。「世界のこれからの進歩という、私が好んで思い巡らす主題」(第二二の手紙)と述べているように、彼女はことあるごとに人間社会の進歩と発展を願い、その方途に思いを馳せている。ノルウェーの古びた教会では廃墟について考え、「時代ごとの壮大な破壊に注目すると、それが不可欠な時の変遷であり、進歩につながっている」との思いを抱く。そして、人間は死後、より高い存在の状態に似合うような姿になるはずだから死は恐れるものではなく、それについて考えていると、やさしい気持ちで愛情に執着するようになる」と述懐して、個の死を越えた人間全体の存在の進歩の意義について思索を深めている(第七の手紙)。また、同じくノルウェーの荒涼たる未開の沿岸地帯を航行した際には、世界の未来の進歩のために人間が

なすべきことを思い描き、はるかな未来では大地がすべて開墾され人間があふれて、世界的飢饉が訪れるかもしれないと心を痛める(第一一の手紙)。そして、人類が常に進歩の道を歩むことを信じて疑わない彼女は、付記にも「私が旅をして来た王国では知識と幸福が増大しているという確信が、私の比較考察のいつもの結果でした」としたためる。

人間と社会の進歩に関する思索へとウルストンクラフトをいざなったのはルソーであった。彼女は『擁護』第一章でこう述べている。「ルソーはすべてが元来正しかったと証明しようと努める。無数の著述家はすべては現在正しいと証明したがる。そして私は全てが正しくなるだろうと証明したい」。ルソーは『人間不平等起源論』(一七五四)で、人間は原初の自然状態において無垢で幸福な状態であるという主張をさまざまな事例をあげて展開した。このルソーの考えを、ウルストンクラフトは『手紙』でも次のように述べて繰り返して斥ける。「世界は完全なものになるために人間の手を必要としている」のであり、「ルソーの愚昧なる黄金時代に人間が留まるべきだったという考えは、自然の理に反しています」(第九の手紙)。だが、『手紙』での主張は『擁護』でのそれがさらに深まった様相がある。第五の手紙にはこう記されている。「あらゆる国が自分の国のようであることを求めるなら、その旅人は自国に留まっているべきでしょう。たとえば、ある国民が清潔な身体や優雅な生活様式の点で一定の水準に達していないと責めるのはばかげています。それは趣味が磨かれさえすれば生じることで、社会全体の洗練と比例してどこでも起こるようなことです。スウェーデン社会の粗野な風習に対する驚きととまどいを正直に綴りながらも、彼女はそれらを先進国である母国英国の基準で計ることを慎重に避け、進歩は拙速にはなく時間をかけて求められるべきだと考えている。「フランスに行く前に北欧を旅行していれば、フランスの虚栄と腐敗についての評価において、私はあれほど辛辣にはならなかったはずです」(第一九の手紙)と述懐しているように、人類の進歩と発展についての思惑は、北欧での観察を経て『擁護』に時に見られる未熟な急進主義を超克しているように見える。

彼女は『擁護』においてルソーの女性観にも異義を唱えている。ルソーは自然界の現象としての男性の能動的側面と女性の受動的側面を重視する余り、女性教育については男性中心主義あるいは家庭維持中心の考えを持つに至っている。『エミール』(一七六二)第五章において彼はこう主張する。男女の共通点は種としてのヒトの共通性に由来し、男女の差異は性差に由来するから一方の他方に対する優位性は存在しない。

しかし、いくつかの点で違いを持つ両性に対する教育は同じであってはならない。なぜならば、彼らは種としての共通の目的を達するためには違った役割をまっとうしつつ互いに補完しあわなければならない。したがって女性は両親や夫に従い、彼らと同じ信仰心を持つ義務を教えられるべきであると。このようにルソーには両性間の権利の主張を越えた愛情の論理も読みとれるが、女性に対する深い尊敬の念とともに男性中心の考え方の存在も否めない。ウルストンクラフトは、ルソーの言う自然の摂理による男女の違いは、自明の理ではなくそのように思いこまれた、すなわち自然化された制度あるいは風習と捉えている。男女間の体力差などは認めるにせよ、従順でおとなしい女性像などは社会習慣によって、それが自然だとして生み出されたものである。女性は権利を獲得し父権制社会での失地を回復し、十全な人間の完成を目指すべきであると彼女は主張する。

ウルストンクラフトは『擁護』第一章で理性は人間と獣を区別する重要な特徴であると説明し、第二章では「心ではなく頭に真実の言葉を投げかけたい」と言明している。「男性は理性を働かせるように、女性は感情を働かせるように造られている(第四章)」という当時の固定観念を打破し、女性は理性との両立を前提として本能や感性を磨くことが必要だと彼女は訴える。それに呼応して『手紙』では、その固定観念ゆえに「男性は万物の専制君主であるということ」になり、「波乱の多い人生の苦闘のほとんどが、私たち女性の抑圧された状況によって引き起こされている」と断じ、「私たちが感情を強く働かせる時は、理性を深く働かせているのです」と反駁する(第一九の手紙)。また、田舎と都会の若い女性の道徳を比較した一節では、社会がより進歩した状態になれば彼女たちの行動は恐れと慎み深さで抑制されると主張する。すなわち、「精神が養われ趣味が洗練されるにつれ情感はより強くなり、一時的な共感より確固としたものを土台とするようになり」、「心の修練が身体の修練に釣り合っていないすべての人は怠惰であると言ってもさほど過言ではないでしょう」と明言するのである(第四の手紙)。あるいは、コペンハーゲンの庶民の女性について「趣味のたしなみや、より進んだ社会生活を彩る魅力は何もありません。このまったくの無知無学は、台所では何かの助けになるかもしれませんが、彼女たちをよりよい親にしているとはとても思えません」と辛辣な批判を展開する(第一八の手紙)。

だが同時に内省的な要素の強い『手紙』では、女性観においてもウルストンクラフトは微妙な揺らぎを見せている。そこには、女子教育の効果に幾分か躊躇を示し、自分の娘の将来への不安を赤裸々に語る一人

の母の姿が見て取れる。「一人の女性として、私が娘にとっても深い絆を感じていることはお分かりでしょう。女性の隷屬的で抑圧された状況を考えると、私は母親としての愛着や気遣い以上のものを覚えます。彼女が信念のために感情を、あるいは感情のために信念を犠牲にさせられはしまいかと不安です。……娘の心を開くことが怖いのです。彼女が自分の住むはずの世界になじめなくなりはいらないかと。不運な女性たち！何という宿命なのか！(第六の手紙)」。ウルストンクラフトは自分の幼い娘に、女性が男性とまったく同等の権利を持つ市民として生きることのできる「信念」を授けることが、理知に走った感情のとぼしい性格の女性を生み出しはしないかと恐れている。彼女がこのような個人的な当惑や逡巡を見せるのは「娘との初めての別れで胸に巣くった一種の軽い憂鬱によって、私の精神が苦しんで」(同)いたせいもあるだろう。しかし、『擁護』のいわば居丈高な調子に比べると、それが問い直され再吟味されて情感の告白と共に語られる『手紙』は、その分だけ読者の胸に染み入ることも否定できない。

その心の揺らめきは、文明と自然の二元論についての彼女の考察にも見られる。前述の、人間は原初の自然状態においては無垢で幸福であるというルソーの黄金時代の概念に反駁しながらも、ウルストンクラフトは自然のままの状態で暮らす人間の素朴な幸福に憧憬を抱いてもいる。第一四の手紙では、「自主独立と美徳、悪徳なき豊かさ、心の墮落なき精神修養」と「ほほえみを絶やさぬ自由」が寄り添う黄金時代の生活を探りたいと願う一方で、「人間は相変わらず弱さと愚かさの混じり合った存在」であると告げる理性の声を聞いて、人間は素朴で無垢な存在であるとするルソーの性善説を肯うことに逡巡を示している。

ウルストンクラフトの内省の痕跡は、紀行文の大きな特徴である自然描写にも刻み込まれている。道中目の当たりにした北欧の荘厳で荒涼とした大自然の様相を、彼女は「ピクチャレスク(絵になるような)」という当時の流行語を頻繁に用いて描写する。たとえば、クリスチャニアへ向かう道中では、岩で覆われた谷、灰色と緑が入り交じった斜面、そして湖と海が交錯する様子に、開墾の進んだ田園地帯になお残るノルウェーの野生の魅力を感じ取る(第一三の手紙)。だが、やや感傷的過ぎる筆致で彼女が描いているのは、大自然だけではなくそれを見つめる自分自身の心の風景でもある。第一の手紙では、初めてスウェーデンの地を踏んだ名も知らない入り江の美しい自然に触れて、その景観を叙述するだけではなく、それによって自身の失意がいかに癒され慰められたかを情緒豊かに記している。また、夜も日の光が残る白夜の美しさに感極まっ

て、眠りにについている森羅万象とさまざまな思いに耽る自分とを並べ比べ、「我を忘れて叫びたくなるほど感情が打ち震え、感動で胸が張り裂けそう」になり「かえっていつもよりも生きていることを実感」する。

あるいは、ノルウェーのテンスベルでは、松と樅の木立ちが生み出す詩的な印象によって神秘的な畏敬の念に打たれ、樹木を哲学者になぞらえ、木陰に敬意を表している（第九の手紙）。また、フレドリクスター近郊で滝を見た時は、轟音を響かせてほとぼしる流れの勢いに圧倒されると同時に、それに刺激されるように自らの感情も高まるのを感じ取り、生きることの意味を問い詰めさえする。しかし彼女の魂はその憂慮を克服して思索の不滅であることに思いを致す。そして「目の前で絶えず変化しながらも同じ姿を保つ滝の流れと同じく、思考の流れを止めることはできない」と感じたウルストンクラフトは「来たるべき人生の暗い影を跳び越えようと、手を永遠に向けて差し伸べた」のである（第一五の手紙）。彼女を襲った失意、苦悩そして憂慮の要因はイムレイとのいきさつによる葛藤に他ならない。苦境の渦中であえて旅立った北欧で、その優美、壮大、そして酷烈な自然は、人間存在にまつわる苦悶を乗り越えようとしている彼女の目には、現実の風景と同時に心の内なる心象風景として映っている。

ウルストンクラフトは旅行中の一七九五年七月三日に、スウェーデンのイエーテボリからイムレイに宛てた私信で、信念と理性に従って行動するために想像力と感情を抑制したが、精神を落ち着かせるためにそれを押し殺すことは魂の力を奪うことだと気づいたと書き送る。そして「私は今自己の回復に努めています。それが私の気質ですし、当地のきれいな空気や、願ってもない体調のよさで表情も生き生きとして来ました」と述べる。北欧の澄み切った大気に助けられて、彼女は傷心から自己回復へと心の旅路を歩いたのである。

北欧の人間と自然に触れながら、人類、女性、社会の進歩について思索を深め続けたウルストンクラフトは、同時に自己の進歩も模索してさまよい、その精神の軌跡をあらわにしている。故国から離れた北の地で、失意から立ち直って自己を取り戻し「それぞれの話の小さな主人公」となった彼女の勇気に満ちた姿は『手紙』を読むものの胸に迫る。だが、それにも増して読者が共感を覚えるのは、理性と想像力、信念と感性のはざまですさまよう彼女の心情の揺れ動きなのではあるまいか。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 2件)

(1)メアリ・ウルストンクラフト著、石幡直樹訳『ウルストンクラフトの北欧からの手紙』法政大学出版局、2012年8月、298ページ

(2)横田由里、浅井千晶、城戸光世、松永京子、真野剛、水野敦子、伊藤詔子、石幡直樹『オルタナティブ・ヴォイスを聞く』音羽書房鶴見書店、2011年7月、171179ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

東北大学大学院・国際文化研究科・教授  
石幡 直樹 (Naoki ISHIHATA)

研究者番号：30125497

##### (2)研究分担者

なし

研究者番号：

##### (3)連携研究者

なし

研究者番号：